

地域の底力

震災の苦難を乗り越え 熊本は力強く前進する

二〇一六年の熊本地震から一年が過ぎた今、
甚大な被害を受けた熊本県内各地において
聞こえてきたのは、前に進もうという声だった。

熊本城二の丸広場から眺めた天守閣（奥）と、国指定重要文化財の宇土櫓。撮影は、2017年4月上旬。17世紀当初から受け継がれてきた宇土櫓は二度にわたる震度7の大地震にも耐え、加藤清正の築城技術があらためて評価された。

取材・文 山内史子 写真 野瀬勝一

熊本の人々の心のよりどころの復活

二〇一六年四月十四日、十六日。

震度七の大きな揺れが、二度にわたって襲った熊本地震から一年が過ぎた。熊本市、阿蘇市、益城町、そして県南の人吉市とめぐり、当時の様子や復興の状況、さらには将来への展望について伺ったお話をお伝えしたい。

最初に訪れたのは、人口約七四万人を数える日本最南端の政令指定都市である熊本市だ。繁華街のにぎわいを前にすれば平常が戻っているかのように思えるが、



熊本城では国指定重要文化財一三棟を含む建造物二〇棟が被災。石垣は全体の二割が崩落した。それぞれの石に番号をふり、元どおりに積み上げていく作業が時間をかけて丁寧に行われる。



ふと立ち止まり見上げるとビルの外壁などに震災の爪痕が見られるのに気づく。

まちの要である熊本城は甚大な被害を受け、まだごく一部のエリ



アしか一般の見学が許されていない。一九六〇年に復元された天守閣は、二〇一九年の早期復旧が予定されているが、石垣等の城全体の完全復旧までには二〇年の歳月がかかるともいわれている。

熊本城の正面に建つ「熊本ホテルキャッスル」もまた、客室をはじめ数多くの損傷が生じた。ことに外壁のタイルがはがれた状況は、痛ましく人々の目に映った。

創業は熊本城の天守閣復元と同じ、昭和三十五年。熊本国体開催にあたり、昭和天皇・皇后の宿泊所として地元経済界が最大限に力を尽くして誕生した。その歴史的

な重みとクラシカルな趣をたたえたしつらいが相まって、多くの県民にとって特別な晴れがましい場所でもある。

館内の中華レストラン「桃花源」は、四川料理の名店として全国に広く知られた存在。現在、ホテルの社長を務めるのは、その「桃花源」の料理長として長年腕を振るってきた齊藤隆士氏だ。

齊藤氏によれば、地階のレストランだけは奇跡的にほとんど被害がなく、市内のホテルに先駆けて四月二十七日に再開したという。

「とはいえ、内心ではホテル経営をやめようと思っていたんです。



上／赤褐色のタイルで覆われていた「熊本ホテルキャッスル」の外壁は、被災後の修復により、シルバー系のアルミルーバーが彩るモダンな姿に生まれ変わった。下／「熊本ホテルキャッスル」代表取締役社長の齊藤隆士氏。後ろを飾る黒澤明氏の絵コンテ「月の城」は、1980年に公開された映画「影武者」で熊本城が撮影に使われた縁で寄贈された。

あって当たり前のように存在していた熊本城が被災して初めて、地元への思いを再認識した人が多いのではないかと、「お菓子の香梅」代表取締役社長の副島健史氏は話す。



そうすれば、銀行様にも株主様にも、そして業者の方にも迷惑をかける。従業員には、退職金を払える。でも、全国から頑張れのコールが届いて、やめられなくなってしまう。そうした中で、熊本城とホテルキャッスルは熊本のシンボルだということを、ひしひしと感じたんです」

再開当初、レストランの利用や宴会の需要はなく、それならばできることをという思いから、炊き出しのボランティアのため被災した益城町や南阿蘇村へと料理人たちと訪れたそうだ。

「熊本県民でホテルキャッスルを知らない人はいないし、建物が傷ついているのもわかっていたか

ら、歓迎してくれましたね。ありがとうの言葉をもらった僕たちも、うれしくなりました」

地震発生翌月の五月には、躯体構造に問題がないことが判明。十二月一日には全室が再び稼働し、新年度を迎えた四月三日には、完全復活宣言となった。

「去年は赤字でしたが、みんな大変なのはわかっていますが、再度初心に戻り、まずは単年度黒字を出す。これが目標ですね」

熊本ホテルキャッスル同様、地元の人々に元気をもたらしたのは、お土産の定番として知られる「誉の陣太鼓」の復活だ。

製造、販売元である「お菓子の香梅」社長の副島健史氏は、阿蘇の外輪山近くに位置する西原村の工場は震災直後、ライフラインが途絶えた上、天井がほとんど落ちて床は足の踏み場もなかったと話す。釜は倒れ、水の良さから選んだ場所であるにもかかわらず、地下水をくみ上げる受水槽が割れてしまったそうだ。

「そんな大変な状況でうれしかったのは、たくさんのお客様や

取引先様から励ましの言葉をいただいたことです。手紙はもちろんインフラが整っていない状況にもかかわらず、車で物資を持って直来接来られた方もいました」

加えて「まずは、誉の陣太鼓」という認識が社員にも取引先にもあり、復旧を目指して全員が丸となったという。その結果、地震発生から約二カ月後の六月二十日には「誉の陣太鼓」の販売再開にいたった。

『「お菓子は平和の使者」との先々代の言葉のもと、お客様の信用、信頼を裏切らないことを心がけてきました。その積み重ねにより誉の陣太鼓が愛される商品になったことを、今回の震災で実感しました」

まだすべての卸先に商品が出せているわけではなく、工場は先々建て直しが予定されている。

「でも、私の周りには後ろ向きになった人はいなかったですね。むしろ、前向きな方が多かったです。昭和二十八年の六・二六水害のときも、地域の方々が一致団結して復旧に向かった。その心が、今も受け継がれているのだと思います」

復旧復興とともに 震災の検証を

県内でもっとも被害が大きかった地域のひとつが、人口約三万四〇〇〇人の益城町だ。産業の要は、米や果物の栽培など農業。隣接する熊本市のベッドタウンの役割も果たしてきた。訪れた四月

震災直後は活動を自粛していたくまモンは、県民の声を受けて二〇一六年五月五日、三週間ぶりに復活し、子どもたちに笑顔をもたらした。



震災後3カ月間、休みなく復旧対策にあたった益城町長の西村博則氏。「たくさんの方から町長、がんばれという声をかけていただき、それが原動力になりました」。



は、がれきの片付けがようやく終りに近づいた頃。多くの更地に加えて一部だが新築の家も目についたが、町長の西村博則氏は「まだまだ終わっていない。これからが正念場です」と力を込めて語った。

震災時は一部損壊以上が九八%、半壊以上も六割以上と、町内のほとんどもすべての建物が何かしらの被害を受けた。約二七〇〇戸の全壊は、県全体の被害の三割以上に及ぶ。

二〇一七年四月現在では、仮設



住宅は一五六二戸にのぼるほか、住民の多くがまだ日常に戻れていない。そして九割以上の人が、「住んでいた場所に帰りたい」と望んでいるという。

そのような状況下、西村氏が県とともに目指すのは緊急用車両が通れるような道路の拡張をはじめとした創造的復興だ。四月には危機管理課が設けられ、防災計画の見直しも図られている。

「見直しの中で進めなければならぬのは、受援計画です。例えばたくさんの人や物が援助で来た場合、どの課にどう割り振って被災地に役に立つようにするかを考えておく必要がある。さらには、ほかの市町村や民間事業者との災害協定を結ぶことで、非常にスムーズにいくと思っています」

東北の子どもたちをはじめ、全国から寄せられた応援メッセージが町長室には飾られていた。益城町では庁舎もまた甚大な被害を受けたため、現在はプレハブの仮設庁舎二棟で業務を執行している。活断層を避けて建設される新庁舎の完成は、二〇二一年を予定。



将来を見据える一方で、これまでの検証作業も進行中だという。

「対応ができたところもあれば、いろいろな問題が出たところもありました。東日本や阪神・淡路の震災の際の検証を踏まえた国の支援に助けられた部分があり、非常にありがたく思っています。その恩返しのためには、今度はわれわれが発信していかなければなりません」

西村氏の言葉の一つひとつが心にしみ、頭の下がる思いだった。

雄大な阿蘇の自然とともにある営み

九州でも有数の観光地、阿蘇山を望む人口約三万人の阿蘇市では、「阿蘇プラザホテル」の代表取締役社長で阿蘇市観光協会会長をも務める、稲吉淳一氏が当時の状況を振り返る。

「まずライフラインが、一週間以上全部止まったんです。情報が全く入ってこないのです。国道五七号線が崩れたことは数日後に知りました」

さらには、温泉が止まった。「阿蘇プラザホテル」が位置する内牧温泉には旅館が一九軒あり、うち一七軒が温泉を有していたが、そのすべてが影響を受けた。

「地震により地下が一・五メートル横にずれ、配管が全部切れました。ですから今回、観光業者がグループ補助金(注)の対象になったのはありがたいことでしたね。この補助金があったから、何とか温泉地として残ることができました。自己投資では難しかったと思います」

「阿蘇プラザホテル」の本格的な営業は、「ふっこう割」が始まった七

注) 中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業に応募し、認定を受けたグループの事業者に対して交付される補助金。

「阿蘇プラザホテル」代表取締役社長の稲吉淳一氏。敷地内では2013年にスタートした阿蘇地元ブランド「然」に認定された特産品を販売している。稲吉氏が手に持つのは、地元の高校生が作ったお米と、阿蘇の水を使用したサイダー。



「阿蘇プラザホテル」と2014年にオープンした「shop & café zen」(右)。カフェのメニューには、「阿部牧場」の牛乳など地元の特産品が並ぶ。

月に入ってからだ。
 「おかげさまで、震災前の約七割までいろいろな状況が戻ってきました。とはいえ『ふっこう割』の効果は一時的なものなので、今年の夏が勝負だと思っています」
 そのためには必要なのは、阿蘇の現状をきちんと知ってもらうことだと稲吉氏は話す。

「熊本市内の皆さんですら、阿蘇にはまだ行ったらだめなんでしょ」と言う方が多いんです。そういう風評被害をなくすためには、いろいろなところに自分たちが出かけて情報発信していくしかない。阿蘇は大丈夫だぞ、と訴えるうえで、われわれみんなが動いている姿を見せることが大切だと思います」

二〇一三年に誘客目的でスタートした阿蘇の振興と観光のブランド「然」への取り組みは、当初は行政主導だったが、現在は民間中心の動きとなっている。稲吉氏自

身もまた、高付加価値な客室をつくるなど、今だからこそあえてチャレンジに挑むのだという。
 印象深かったのは、そもそも内牧温泉が阿蘇の噴火を見に行くために生まれたという経緯だった。
 「熊本にゆかりのある小説家夏目漱石の作品『二百十日』に書かれているように、そもそも噴火を見るのに絶好の場所としてこの温泉地は生まれました。阿蘇の観光や農業は、温泉が出て、豊富な水にも恵まれた自然によって生み出された。自然は宝物です。商売は大変ですが、日々の風景の美しさ、夕日や朝日の神々しさといった恩

「阿蘇牧場」の事務所に飾られていた書は、従業員の家族の手によるもの。その力強い筆の運びは、阿部氏の極めて前向きな姿勢と重なった。「阿部牧場」では500頭ほどの乳牛を牧草で飼育。やわらかな余韻が心地よい「ASO MILK」は、代表取締役の阿部寛樹氏曰く、搾りたての生乳に近いおいしさとのこと。



恵が大きい土地だと思います」
 加えて、阿蘇には「蘇(よみがえる)」という文字が含まれていると、稲吉氏は笑顔を見せた。
 そんな阿蘇の自然の恵みを、美味なる牛乳づくりに活かしたのが、阿部牧場だ。二〇一三年には、ブリュッセルの食品のミシユランガイドともいわれる国際味覚審査機構のコンクールで、同牧場の牛乳と「のむヨーグルト」が三ツ星を

阿蘇山にある計7つの噴火口のうち、現在、唯一噴煙を上げている中岳。2017年6月現在、火山活動は落ち着いている。



受賞。地元のみならず、全国から注目を集めていた矢先の震災だった。

牛舎にかけつけた社長の阿部寛樹氏が目にしたのは、驚いた牛が柵を壊して逃げ回る姿。電気と水が止まったうえ、もともと使っていた地下水が途絶えたため、目の前にある川から水をくみ上げたという。

「牛は搾乳をしないと、乳房炎という病気になるてしまいます。搾乳に必要な電気は発電機で起こし、施設等の洗浄などに使う水や牛の



全国各地にある約四五〇の阿蘇神社総本社、阿蘇山麓に位置する阿蘇神社では国宝の楼門と拝殿が倒壊したほか、神殿も三カ所が半壊。二〇二二年の再建を目指している。

飲み水を最低限確保するという状態でした」

徐々に復旧を進めていくなか、阿部氏自身が企画した牛乳と阿蘇の特産品を多彩に詰め合わせた「復興支援セット」により転機が生まれる。五月の販売開始から二万セット以上の注文があり、震災で仕事を失っていた観光関係者の雇用にもつながったそうだ。

「農家の高齢化がどんどん進み、人口も減少する状況で、産業は農業と観光以外ほとんどない。自分のなりわいを通して地域にどんな貢献ができるだろうかと、地震前

からずっと考えていました」

今、阿部氏がとりわけ気にかけているのは、震災後、阿蘇での暮らしや農業に未来を描けなくなっている子どもたちの存在だ。

「挑戦し、頑張っている大人の姿を見せる段階に来ているのかなと。誰かが立ち上がらなければいけない。だとすれば、僕ら若い世代がそれを担うのかなと思います」

まずは自分の会社が元気な姿をみせなくてはと、阿部氏は先々の事業計画を前倒しし、積極投資、積極雇用に努めているという。

「阿蘇のサービスの皆さんは非常に疲弊し、経営も厳しい状況にあります。一方、私は商品の販路拡大の道がまだあるので、踏ん張るしかない。お客様が戻ってくるまで準備をして、阿蘇の魅力を凝縮しながら磨きをかける時間だと認識しています」

風評被害を経て 立ち上がった人吉

震災の際、熊本県全域で同規模の揺れがあったわけではない。例えば、県南に位置する人口約

三万五〇〇〇人の人吉市では、震度五を記録。その被害は、熊本北部のような大きなものではなかったと語るのは、旅館「清流山水花あゆの里」のおかみ、有村政代氏だ。有村氏は地元のおかみによる「人吉温泉女将の会 さくら会」の会長も務める。

建物などへの直接のダメージは小さかったものの、震災直後は予約がすべてキャンセルになった。

「各地の被害の状況を知って、なにもできずにいたなか、阿蘇の宿のおかみさんから言われたんです。このままでは熊本県が全滅になる、人吉はそんなに被害がないのであれば、あなたが熊本の代表で頑張つてと。ならばピンチをチャンスに変えようと、行動を起こし

例年、3月から11月にかけて運行される大正の汽笛が鳴り響く「SL人吉」(下)と、特急列車「かわせみ やませみ」。ともに熊本駅～人吉駅間を走り、球磨川の美しい景色が楽しめる。



「清流山水花 あゆの里」ほか人吉市内の旅館や飲食店では、新たな試みとして無色無臭の温泉水を活かした「人吉温泉カクテル」を展開。



「清流山水花 あゆの里」のおかみ有村政代氏は「今回の地震で人吉温泉のおかみの会である『さくら会』の団結が、以前にも増して強まった」と話す。

ました」

子どもたちを球磨川のラフティングに招待したり、各旅館で無料の入浴を受け付けたり。さらには鹿児島や福岡、あるいは東京のアンテナショップまで出かけて人吉のPR活動に努めた。

逆に人吉へと、応援にかけつけた人たちもいた。

「東日本大震災のときに福島に行ったんですが、今度はあちらが応援にみえたんですよ。うれしかったですよ。」

たですね。苦しいときは、お互いに慰め合って応援する。それが人のつながりをつくっていくのかなと、つくづく思いました。地震できついけれども、いいこともあるんだなと」

七月には「ふっこう割」の効果で、

予想以上に予約が入る。もともと人気の高かった、熊本と人吉の間を結ぶ「SL人吉」に加え、二〇一七年三月には人気デザイナー水戸岡鋭治氏（同氏のインタビュ

は、本誌二〇一二年冬号をご覧ください）による観光列車「特急かわせみ やませみ」が運行開始となり、話題を呼んだ。人吉駅で列車を乗り継ぎ、隣接する鹿児島県

震災時、上階ではテレビが倒れるなどの被害があったが、建物自体にさほど大きな影響はなかったという。裏手は球磨川に面しており、ラウンジや客室からやわらかい景色を満喫できる。



へと南下する観光客も多い。

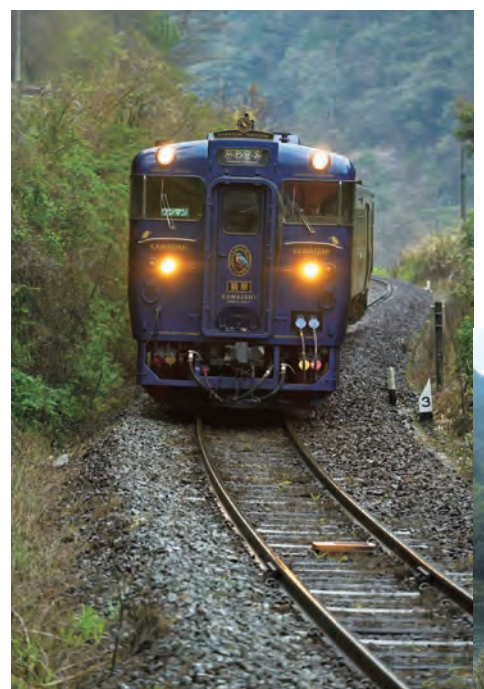
「すべては、つながりですね。九州は一つ。熊本だけではなく、九州全体でという大きな気持ちにならないといけないと思います」

人吉市と隣接

する球磨郡は合わせて球磨焼酎と呼ばれ、米からつくる球磨焼酎のふるさとでもある。その職人技は一六世紀前半から受け継がれ、現在、全二八軒ある蔵のなかで、九軒が人吉市内で焼酎を造っている。

そのひとつ、一九〇三年に創業した織月酒造の社長である堤純子氏は、二〇一六年一月の現職就任直後に震災にみまわれた。蔵の設備にさほど影響はなかったものの、一時期は出荷も厳しい状況に直面した。

「人が集まることも飲むことも、ほとんど中止になりました。熊本市内含め、県内の飲食店さんやお酒の売り場も被害に遭われましたし、家庭で飲まれる量も減ったと



思います」

蔵では試飲もできる無料見学も行っており、年間四〜五万人の観光客が訪れていたが、それも途絶えた。

「お酒は生活に必要不可欠なものではなく、あまり支援助資に向きません。ですから被害に遭われた方の片づけの手伝いに何うなど、できる限りのことに努めました。そうした中、徐々に、下を向いてばかりでもしょうがないという気持ちだが、熊本の皆さんのなかに生まれていくのを感じました」

同社の売り上げの半分を占める代表銘柄「織月」は、日々の晩酌の定番的な存在。現在、地元はもちろん、熊本市内でも売り上げが



織月酒造では仕込みの様子や貯蔵室を見学できる、無料のツアーを受け付けている。見学終了後は、銘柄による個性を味わえる試飲コーナーへ。



織月酒造代表取締役社長の堤純子氏は、人吉温泉観光協会の理事でもある。古い町並みも残る人吉の町は日本遺産に認定されており、堤氏はそのPRにも力を注いでいる。

回復しているという話には、多少なりとも熊本本の暮らしに日常が戻ってきている表れのようにうれしくなった。

困難があってもこだわっていたのは、原料となる米と水の質だ。

「会長からの教で、原料に關しては一切コストダウンするなど重々言われています。米焼酎は、お米とお水しか使いません。その大切なお米にかけるお金を削ってどうするんだと。地域に根差した中小企業ですから、いいものをつくり続けなければ長く支持していただくことはできないと思っています」

そうした思いが込められた銘柄

の一つが「川辺」だ。球磨川の支流である川辺川の水と、その一帯で栽培された米を原料として造られている。

人吉盆地で球磨川と合流する川辺川の水質は、国土交通省による全国一級河川の水質ランキング調査で二〇〇六年から一〇年連続トップに。本流の球磨川もまた、例年上位に選ばれてきた。そして「川辺」も、二〇一三年米国の歴史ある品評会で最高金賞に輝いた。こだわりの実った結果だ。

香り立つ「織月」、後味軽やかな「川辺」とともに仕込み水を口に、旅館「清流山水花あゆの里」のおかみ、有村氏が歌うように語って

くれた人吉の魅力が脳裏をよぎる。「人よし、味よし、温泉よし。空気よしに水よし」

この地の営みもまた、阿蘇同様、長年にわたり自然の恵みと密接に関わってきたのだ。

被災者の痛みを最小化するスピーディーな対応

最後にお会いしたのは、熊本県副知事の小野泰輔氏だ。

「まだ一年しかたっていないのかと思うくらい、長かったです。多分、三年、四年分の仕事があったのではないかと」

熊本の人々すべての思いが凝縮されているかのような重みのある言葉の後、小野氏は当初の対応と今後の対策について語ってくれた。

「地震後直ちに知事が示した『復旧・復興の三原則』は、一番目が被災者の痛みを最小化すること。二番目は単なる復旧ではなく、創造的復興を目指すこと。三番目はその復旧・復興を熊本のさらなる発展につなげることです」

被災者の痛みを取り除くために、

いち早くつくられたのが県独自の仮設住宅だ。県産の木材を使う、断熱材を増やす、戸当たりの敷地面積を従来の一・五倍にするなどに、被災者の痛みを最小化できるように、県として可能な限り居心地のよい空間になるよう努めた。

相談員が仮設住宅を訪問し、見守り活動などを行う「地域支え合いセンター」や、家や家族を失った苦しみ、悲しみに専門のスタッフに対応する「熊本こころのケアセンター」も設けられた。

さらには、仮設住宅におけるコミュニティ形成の場として「みんなの家」を整備した。もともとは東日本大震災の際、「くまもとアートポリス」のコミッションナーである建築家・伊東豊雄氏による提案で熊本県から仙台に提供した、熊本県産材を使った「みんなの家」が始まり。過去の経験が活かされた形となった。

仮設住宅の充実の一方、本體工事費一千万円程度で建てられる「くまもと型復興住宅」のモデル住宅



熊本県副知事の小野泰輔氏は、明石で生まれ東京で育った県外出身者。何事にも一途で誇り高く、地域とのつながりに愛着を持っているのが、熊本県民の魅力だという。



をつくり、内覧を受け付けている。「家の具体的な形が見えると、次のステップに進もうという希望が人には湧いてくるんだということを感じました。復旧にあたっては、制度だけではなく、被災者の心を動かすような働きかけも大事だと思います」

今後のさらなる復興にあたり、知事の思いと連動して小野氏が努めているのは、すべての取り組みのスピードアップだ。

「もとの場所に戻るまでに時間がかかるのと、いくらその土地に愛着があったとしても、例えば子どもの通学や職場の問題もあり、時間の経過とともに人は引き返せな

くなってしまふ。だから、急ぐところは急ぐ。スピードアップの妨げになるものは、できる限り早め早めに取り除かなければなりません」

対応を迅速に進めるため、県や市町村では任期付職員を採用。県では二〇一七年四月から採用し、市町村では今後、東京、福岡、大阪などの大都市圏で、さらなる技術職員を募るといふ。

今後の熊本に目を向けると、観光面では、世界最大級二二万トンのクルーズ船も寄港できる拠点の形成するため、八代港にクルーズ船専用岸壁が整備されることが決まったそうだ。地震で大きな被害のあった空の玄関口である「阿蘇くまもと空港」は、民間の知恵と資金を活用して運営する「コンセツション方式」での活性化や、国内線と国際線を一体化した新たなターミナルビルを建設する計画が持ち上がっている。

また、震災前から進められていた、県南地域におけるフードバレー構想の展開も活発化してきた。

「熊本県は産業集積が県北に偏っています。そのため、働く場が少ない県南では若者が流出し、生産

年齢人口の減少が進んでいます。もともと農林水産業が盛んなところですので、農林水産業、特に食の分野を通じてその付加価値を高め、地場の企業が雇用を伸ばせな

いかと考えています」

菌車が次々と、あちらこちらで動き出す音が聞こえてくるかのような気分になられながら、各地で聞いた建設的な言葉が思い出された。今回お会いした方々が皆、前向きだったのが印象深く、その理由を小野氏に尋ねてみた。

「もともと、熊本の人には、明るくておおらかですが、今回の地震で大変な被害を受けた中でも、総じて元気に振る舞われた方が多かったと思います。阿蘇という火山があるため、自然と常に向き合い、恵みとともに生きてきた歴史が、そうした気質や行動に表れていると思います」

地震だけではなく、水害や阿蘇山の噴火など、これまで幾度となく、熊本に住む人たちは大きな困難を乗り越えてきたのだ。

「この地震を乗り越えてみんなが成長する、熊本の持っている可能性を引き出すビジネスをする、優

コミュニケーションの場となる「みんなの家」は、県内六二の仮設住宅団地に計八四棟が建てられた。写真は南阿蘇村の様子。写真提供：くまもとアートのボリス事務局（熊本県建築課）。撮影：©omarkyoko



秀な人を引っ張ってくる、あるいは観光でもっともっと人が訪れるようにする。それができれば、震災前よりも熊本はよくなると思います」

官民挙げた総力での復興がうまくまわりだしたとき、熊本はこれまでにも増した明るさを放つことだろう。それまでに私たちにできるささやかながらも最大の支援は、記憶を風化させないこと。そして風評被害に惑わされず、現状をきちんと把握しながら熊本を思うことだと、胸に深く刻んだ。